

「どの子も育つ。育て方一つ」

(2)でお話しました鈴木鎮一先生は、松本市で幼児学園を経営していらっしゃいます。先生は「幼児は幼稚ではない。おとなの及ばない素晴らしい能力を持つ幼児に対して、幼稚という言葉の幼稚園という名を付けるのはおかしい」とおっしゃって、幼児学園と呼んでいるのです。そこに、先生の幼児教育に対する考え方が躍如としていてはありますか。

この幼児学園では、早くから私の漢字教育を取り入れて下さっていて、去年は、招かれて二日にわたって見学もし、子供たちの実際指導もして来ました。

「どの子も育つ。育て方一つ」。この精神で幼児教育に当たっていますこの園では、決して入園の選抜試験をしませんのに、この園で教育を受けた子どもたちは、平均で160というIQ(知能指数)を持つ子どもに育っていると聞きました。

子どもたちを、二日にわたって指導しましたが、どの子の顔も皆生き生きと輝いていて、質問にも活発に応じ、まことに指導することの楽しさを味わわせていただきました。

次から次へと、どんな漢字を提出していても、その場でたちまち

覚えてしまい、翌日試してみますと、ちゃんと覚えていて、すらっと読んでしまいます。頭の働きが鋭敏で、学習に常に興味と関心を持って臨んでいますので、いっぺんで覚えてしまうのです。

ほんとに働きのよい頭は、何事に対しても新鮮な気持で相対しますし、強い関心を持って漢字を観察しますので、よく記憶できるのだと思います。

漢字は教えるものではない

ところで、私の漢字教育では、「漢字を教えようと思ってはいけない」という戒めがあります。子どもが漢字に関心を持たない限りどんなに教え方のうまい先生でも、子どもに漢字を覚えさせることはできないからです。

実は、教え方のうまい先生とは、子どもの心をあやつって、自分の計画通りに子どもの心を引っぱっていくことができる先生のことです。決して、学識の高い低いには依りません。

親が子を教える場合、一番ありがちなことで一番いけないことは、すぐ“夢中になる”ことです。夢中になってよいのは子どもの方であって、教える親は、常に冷静でなければなりません。

ところが、たいていは親の方が子どもを勉強させることに一生懸命になって、子どもの方は少しも一生懸命になりません。

このごろは、ヴァイオリンやピアノのおけいこが盛んですが、子どもがそれを習いたいと思うよりも、親が子どもにこれを習わせたくて習わせている、という場合が多いようです。これでは成功するはずがありません。

鈴木先生は、子どもが習いたくてたまらなくなるまでは、ただ見学させるだけで、絶対に楽器に手を触れさせないそうです。子どもがどうにも弾きたくてたまらなくなった時、「では、先生の言いつけを守るとい約束ができるなら、弾かしてやりましょう」と言って許しますと、子どもは、苦しいはずのきびしい練習にもりっぱに耐えて勉強するようになるそうです。

ちょうど、飢餓状態にあった人間が食べ物にありついたようなもので、どんな物でもおいしく有難くいただけるわけです。反対に、満腹の時は、御馳走を口に押し込んでも、猫でさえ食べようとはしません。

幼児にまず“関心”を持たせる

心からしたいと望まないことには、幼児は努力できないのです。とこ

ろが、たいていの親は、子どもの心の動きに頓着なく、親の意志を子どもに強要するのです。子どもがこれを受け入れるはずがありません。

幼児というものは、元来、貪欲なくらい学習意故に燃えているものです。だから、環境に漢字がうまく用意されているならば「これなあに」といって、うるさいほど質問し、一度尋ねて教えられた漢字はその場でたちまち覚えてしまうものです。

これは、おとなには全く想像もつかない、また、及びもつかない能力です。

幼児の教育は、教えようと思うものにその関心を向けさせることが大切で、関心がそこに集中されさえすれば、あとはもう何もしてやることはありません。

こうして漢字をたくさん覚え、書物が読めるようになれば、自然と読み物を意欲的に読むようになります。書物を読むことの楽しさを理解します。そうすれば、文字を通して、人の心の美しさにも触れ、これを理解して自分の心の糧とし、情操豊かな人間に育つはずです。私の漢字教育の目的はここにあるのであって、漢字そのものの習得にあるわけではありません。